

大学構内の池で採取した水を、6年生の子どもたちと顕微鏡で観察していると、立派なケンミジンコが見つかりました。丸みを帯びた頭胸部から細長い腹部が伸び、その先には長い毛をもつ尾叉があります。左右には大きく広げた長い第1触角も見えます。その姿を見た子どもから、思わず「まるでエビじゃん」という声が上がりました。実はこの観察、分類学的にもなかなか鋭いものです。

ケンミジンコは、いわゆるミジンコとは異なるカイアシ類ですが、エビやカニと同じ「甲殻類」です。では、この小さな生き物が「エビの仲間」である「エビデンス」はどこにあるのでしょうか。単に姿が似ているからではありません。甲殻類に特徴的な第1・第2の2対の触角をもち、体はいくつもの節に分かれ、そこに関節をもつ付属肢が配置されています。さらに遊泳脚には、甲殻類の基本形である二叉型付属肢の構造も見られます。「エビじゃん」という子どもの直感が、形態を詳しく調べることで、ちゃんと「エビデンス」のある観察になったわけです。

もう一つ目を引くのが、頭部中央に黒く見える一つの眼点です。ケンミジンコの仲間は、この単眼がギリシャ神話に登場する一つ目の巨人「キュクロプス (Cyclops)」を思わせることから名づけられ、キュクロプス目 *Cyclopoida* に分類されます。小さな池の一滴の水の中にも、姿を観察し、形態を比べ、分類へとたどっていく生物学の楽しさが詰まっています。

(2026年9月上旬／文京区お茶の水女子大学構内)

